

## 『スーダン遺跡紹介』 第3回

### メロエ西墓地(West Cemetery) その1

坂本麻紀(アラブ調査室研究員)

#### はじめに

スーダン遺跡紹介の3回目は、第1回、第2回に続き、2011年にユネスコ世界遺産に登録された「Archaeological Sites of the Island of Meroe」の中から、メロエ西墓地(West Cemetery)を紹介する。

メロエ西墓地は、前回紹介した南墓地(South Cemetery)と同じく、クシュ王ピアンキ<sup>1</sup>(Piankhy)の時期(紀元前8世紀中頃)、あるいはそれより前に墓の造営が始まったと考えられる墓地遺跡である。南墓地はメロエ初期(紀元前3世紀中頃)に2人の王とその王妃の墓が造られた後、墓の造営が終わり、向かい側に位置する北墓地(North Cemetery)が新たな王墓地となる。メロエ末期(紀元4世紀中頃)まで北墓地の墓の造営は続くが、今回紹介する西墓地は北墓地と概ね同じ紀元3世紀末頃まで墓の造営が行われたと考えられている。1千年の間に800基以上の墓が造営された西墓地は、遺跡の大部分が破壊を受け、現在では崩れたものを含め15基程度の小型のピラミッドしか見ることができない。

広大な遺跡の大部分を瓦礫が占め、北墓地や南墓地のような美しいピラミッドもないが、クシュ王国の歴史を考える上では非常に重要な遺跡である。発掘報告書の墓データの数も多いことから、今回と次回の2回に分けて、この遺跡を紹介したいと思う。

尚、写真は全て筆者が撮影したものであるが、図版等は適宜、引用元を示す。



図1 Meroe West Cemetery

## 1. 遺跡の規模(広がり)と墓の年代

西墓地は 360m×280m ほどの範囲の平地に、南東から北西にかけて墓群が広がっている。西側には土坑墓(pit grave)を中心とした墓群、その東隣にはマスタバ(Mastaba)やピラミッドなど上部構造を持つ大型の墓、また中央には上部構造を持たない岩窟墓(rock-cut tomb)の墓群、そして東側にはピラミッドなど上部構造を持つ大型の墓と、上部構造を持たない岩窟墓が密集している。現在、西墓地で確認できる墓は東側のピラミッドが中心であるが、かなり損傷しており、ピラミッドの内側に詰められている粗石などが見えているものも多い。西墓地はクシュ王国の高官や王の家族などエリート層の墓地と考えられており、北墓地や南墓地の王たちの墓のように礼拝施設(Chapel)などを持つ大規模なピラミッドも造営されているが、大部分は上部構造を持たない墓となっている。

西墓地は南墓地よりも早く利用が開始されたと考えられており<sup>2</sup>、この遺跡の発掘調査報告書「The Royal Cemeteries of Kush」(R.C.K.) Vol.5: The West and South Cemeteries at Meroe (1963)によれば、クシュ王ピイの時期からメロエ末期(紀元前8世紀中頃～紀元後3世紀末)まで1千年以上に亘って墓が築かれ、827 基のデータが報告されている<sup>3</sup>。墓の年代は墓の型式や埋葬品等によって決定されるが、この遺跡の墓は盗掘や破壊によって年代を決定付ける証拠が少ないためか、報告書では年代幅を 200 年など非常に広く設定している墓が多く見られる。また、年代不明の墓も非常に多く、827 基のうち 290 基(全体の 35%)が年代不明となっている。さらに「墓ではない」と記載されたものが7基あった。今回は「墓ではない」7基を除いた 820 基を分析対象とし、年代を区切りながら墓の分布状況を見て行きたい。

地図色分け	墓の年代	墓の数	割合
赤	ナパタ期: 紀元前753-330年頃	329	40.1%
緑	ナパタ期-メロエ期: 紀元前6世紀前半-2世紀前半	10	1.2%
青	メロエ期: 紀元前3世紀中頃-紀元後3世紀末	191	23.3%
色なし	年代不明	290	35.4%
	総計	820	100%

表1 西墓地の墓(年代と数)

この西遺跡の墓は年代幅が大きいので、南墓地で行ったように墓の年代を細かく区切って時期ごとの分布状況を示すことが難しい。そのため今回は、それぞれの墓に設定されている年代を基に、表1のように「ナパタ期」、「メロエ期」、この両方の時期にかかる「ナパタ期-メロエ期」、そして「年代不明」の4つの時期に分け、それぞれの時期に属する墓の数と、全体に対する割合を示した。また図2はこれらの情報を基に、年代ごとに墓の分布状況が分かるよう地図上で示したものである。

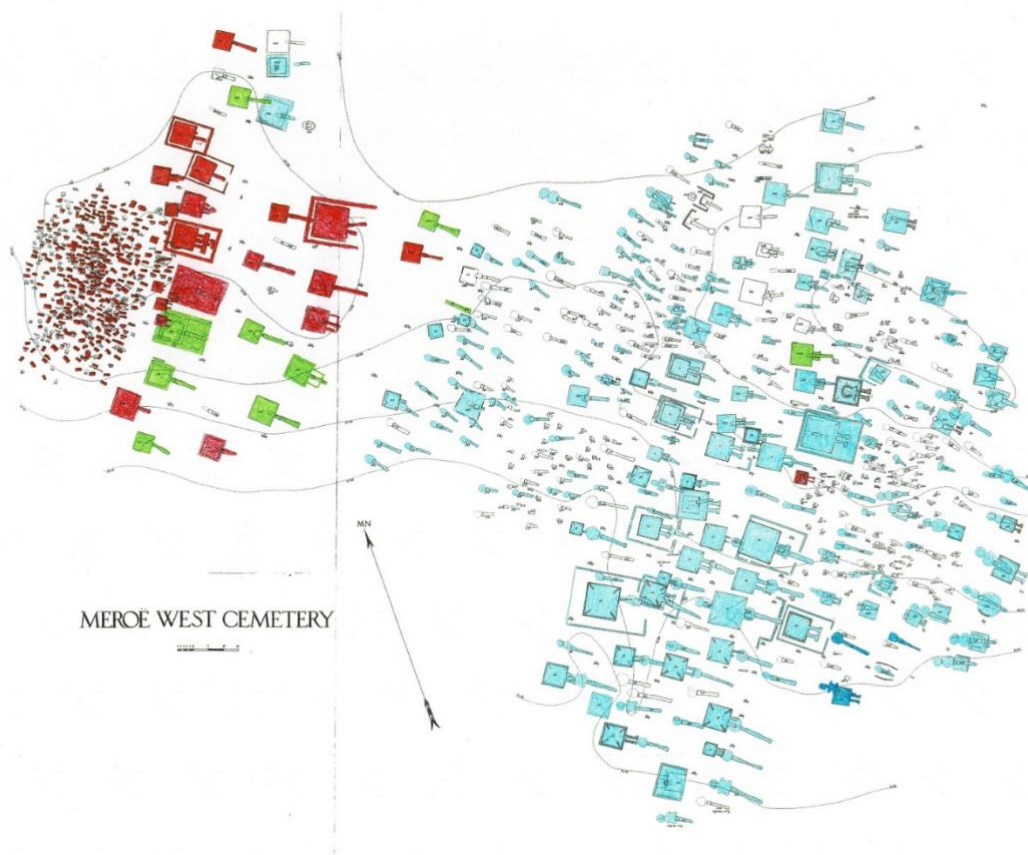


図2 メロエ西墓地遺跡全体図(Dunham 1963を元に筆者が年代ごとに色分け)

図2の地図を確認すると、墓の大きさや上部構造の有無にかかわらず、南東から北西に軸線を持つ墓が多いように見える。今回、それぞれの時期に属する墓を色分けしたが、ナパタ期は 400 年ほどの造営期間があり、またメロエ期は 500 年以上の造営期間があるため、遺跡の東側はナパタ期の墓が広がり、中央から西側はメロエ期の墓が広がっている、という大まかな分布しか示すことができない。年代不明の墓については、この遺跡の墓の約 35%を占めるなど、数が非常に多いため分析対象としたが、これは西遺跡全体の墓の型式を考える上で重要と考えたからであり、分布状況については他の時期の墓のように重要と考えていない。ただし一部の墓については、立地からナパタ期やメロエ期に含めることができるのではないかとと思われるものもある。

今回、表では示していないが、それぞれの時期を細かく見ると、ナパタ期に属する墓については、ヌビア人がエジプトを支配した「古代エジプト第 25 王朝(722-655 BCE)」の時期を含む墓<sup>4</sup>が遺跡の西側に密集して築かれ、ナパタ期全体の9割の墓がそこに集中していることが分かった。また、メロエ期に属する墓では、メロエの新たな王墓地である北墓地に大型のピラミッドが造営され始めた紀元前3世紀頃から、西墓地でも大型の上部構造を持つ墓が近接して多く築かれ、北墓地のピラミッドの大きさが小さくなる紀元後1世紀後半からは、西墓地でもそれまでに比べると規模が小さい墓が見られるようになる。ただし、墓の数自体はそれ以前とそれほど変わらないように思われる<sup>5</sup>。

メロエ期には、墓が近接して築かれたり、すでに建っている他の墓の周壁の位置を変えて新たな

墓を築く例などが見られる。その1つが西墓地の南西に位置する Beg.W.20 という番号がつけられたピラミッドであるが、このピラミッドは紀元前 100 年頃の Tedeqene という王子の墓とされる大きな周壁を持ったピラミッド (Beg.W.19) と、そのすぐそばの小さなピラミッド (Beg.W.30) の間に無理に割り込んで造られている。カラノグ (Karanog) やセディンガ (Sedeinga) といった遺跡では、過去に造られた記念碑的な大きな墓の周りに低い地位の人々の墓が築かれることがあり、重要な人物への憧れがあったのではないかと解釈されている<sup>6</sup>。それと同じようなことが Beg.W.20 でも起こっていたのではないかと考えられているが、Beg.W.20 からは装身具や青銅製容器など多数の出土品がみつかり、地位の低い人物の墓ではないように思われる。どのような理由で墓を築くことになったのか非常に興味深い。

## 2. 墓の型式

現在スーダンで見ることができるピラミッドは、クシュ王ピアンキが自らの墓にピラミッドを導入したことに始まると考えられている。南墓地と同様、ピアンキの時期に造営が始まった西墓地では、どのような墓の型式が見られ、ナパタ期とメロエ期という1千年ほどの造営期間を通してどのような変化が見られるのか見ていきたい。

墓の年代	計	土坑墓				岩窟墓				下部構造不明			
		(上部構造なし)		(上部構造あり)		(上部構造なし)		(上部構造あり)		(上部構造なし)		(上部構造あり)	
		墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合
ナパタ期: 紀元前753-330年頃	329	296	36.1%	13	1.6%	0	0%	16	2.0%	2	0%	2	0.2%
ナパタ期-メロエ期: 紀元前6世紀前半-2世紀前半	10	0	0%	0	0%	1	0.1%	9	1.1%	0	0%	0	0%
メロエ期: 紀元前3世紀中頃-紀元後3世紀末	191	1	0.1%	0	0%	85	10.4%	96	11.7%	2	0.2%	7	0.9%
年代不明	290	85	10.4%	1	0.1%	173	21.1%	11	1.3%	18	2.2%	2	0.2%
総計	820	382	46.6%	14	1.7%	259	31.6%	132	16.1%	22	2.7%	11	1.3%

表2 西墓地の年代別の墓(型式、数、割合)

発掘報告書と表2でそれぞれの時期の上部構造について確認すると、ナパタ期の墓では上部構造を持つ墓が 31 基あるが、そのうちピラミッドは6基、マスタバあるいはピラミッドとされるものが3基、マスタバが10基となっており、残りの墓は部分的に基礎が残っている場合や、上部構造の痕跡が認められるだけで、上部構造がどのようなものだったのか推測不能となっている。また、ナパタ期-メロエ期の墓では、上部構造を持つ墓9基のうち、マスタバあるいはピラミッドとされるものが1

基、マスタバが5期、残りは基礎のみであった。メロエ期の墓では103基の上部構造を持つ墓のうち、ピラミッドが 47 基、マスタバあるいはピラミッドとされるものが 24 基、マスタバが 11 基、円形の墳丘のようなものが1基、残りは基礎や痕跡のみで推定不能である。年代不明の墓では、上部構造を持つ墓が 14 基あり、そのうちピラミッドが1基、マスタバあるいはピラミッドとされるものが1基、マスタバが5基、残りは基礎や痕跡のみとなっている。

墓の年代	墓の数	土坑墓												岩窟墓								下部構造不明							
		(上部構造なし)						(上部構造あり)						(上部構造なし)				(上部構造あり)				(上部構造なし)	(上部構造あり)						
		合計	I	II	III A narrow pit	III B wide pit	III C 矩形の土坑+四隅に穴	III D 矩形の土坑+四隅に穴	イレギュラーな土坑墓	合計	III A narrow pit	III B wide pit	III C 矩形の土坑+四隅に穴	III D 矩形の土坑+四隅に穴	イレギュラーな土坑墓	合計	V rock cut	VI pillared chamber	VII niched chamber	VIII drop type	IX slope and N-S undercut, child's grave	合計	V rock cut	VI pillared chamber	VII niched chamber	VIII drop type	IX slope and N-S undercut, child's grave	不明	不明
ナパタ期: 紀元前150-330年頃	329	296	0	0	192	22	59	6	17	13	8	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	16	15	0	0	1	0	2	2
ナパタ期-メロエ期: 紀元前6世紀前半-2世紀前半	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	9	8	0	1	0	0	0	0	
メロエ期: 紀元前3世紀中頃-紀元後3世紀末	191	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	85	23	0	2	57	3	96	39	1	8	48	0	2	7	
年代不明	290	85	4	3	24	19	3	0	32	1	0	0	0	1	173	30	0	0	56	87	11	6	0	0	5	0	18	2	
総計	820	382	4	3	217	41	62	6	49	14	8	1	1	3	259	54	0	2	113	90	132	68	1	9	54	0	22	11	

表3 西墓地の年代別の墓(型式、数)詳細

次に下部構造について表2を見ると、西墓地の墓は全体の 48.3%にあたる 396 基(上部構造なし;382 基、上部構造あり;14 基)が土坑墓、47.7%の 391 基(上部構造なし;259 基、上部構造あり;132 基)が岩窟墓となっていることが分かる。

土坑墓は特にナパタ期に多く見られ、墓全体の 37.7% (上部構造なし;296 基、上部構造あり;13 基)を占めている。西墓地の土坑墓の主流は、III A と呼ばれる矩形で横幅の狭い土坑(Narrow pit)であり、表3では、この型式の墓が 225 基(上部構造なし;217 基、上部構造あり;8 基)と土坑墓全体(396 基)で最も多い。西墓地の土坑墓は圧倒的に上部構造がない墓(396 基のうち 382 基が該当する)となっている。

一方、岩窟墓はメロエ期が 181 基(上部構造なし;85 基、上部構造あり;96 基)、年代不明が 184 基(上部構造なし;173 基、上部構造あり;11 基)と、どちらも墓の総数は同じくらいであるが、上部構造の有無を考慮すると、年代不明のほうは圧倒的に上部構造がない岩窟墓であることが分かる。西墓地の岩窟墓の主流は、VIIIの Drop type と呼ばれる型式の墓で 167 基(上部構造なし;113 基、上部構造あり;54 基)が報告されているが、そのうちの 105 基(上部構造なし;57 基、上部構造あり;48 基)がメロエ期に属する墓となっている。西墓地の岩窟墓では、このVIII以外にVの Rock-Cut と呼ばれる下降階段などで埋葬室へアクセスするシンプルな墓も 122 基(上部構造なし;54 基、上部構造あり;68 基)報告されている。ナパタ期の岩窟墓は 16 基あるが、VIIIの墓は1基だけであり、残りの全てがVとなっている。また、ナパタ期-メロエ期の時期の岩窟墓に関しても10 基(上部構造なし;1 基、上部構造あり;9 基)のうち 9 基はVである。ナパタ期に属する墓がほとんどを占める

南墓地でも、やはり岩窟墓の主流はVであり、VIIIは4基しか見られない。岩窟墓については、ナパタ期からメロエ期へ年代が変わると同じように、墓の型式もVからVIIIへ変わるといえる。

またナパタ期ではピラミッドが6基確認されているが、そのうちの5基は土坑墓のⅢAであり、残りの1基が岩窟墓のVとなっている。土坑墓の場合、遺体を埋葬した後でなければ上部構造を設けることができないため、ナパタ期の初期には土坑墓の上に上部構造を持つ墓もあるが、年代が新しくなるにつれ、階段やスロープなどから埋葬室へアクセスすることができる岩窟墓が主流となる。

西墓地は 800 を超える墓があり、それぞれが持つ情報を上手く整理できておらず、あまり詳しく扱うことができなかったが、土坑墓と岩窟墓には今回紹介していない様々な型式がそれぞれあり、それらと上部構造の有無、墓の位置など様々な要素を考慮して分析をすると、もっと面白いことが分かると思うが、筆者はまだそこまで詳細な研究ができていない状況である。

## おわりに

今回は西墓地の時期ごとの墓の分布と墓型式を取り上げたが、報告書から得た墓のデータをどのようにまとめたら良いか試行錯誤をしているところであり、上手くこの遺跡の魅力を伝えることができなかったように思う。次回はもう少し上手く伝えられるようデータを整理し、今回扱ったところも補足できるようにしたい。最後にメロエ西遺跡で撮った写真をいくつか掲載する。全体的に崩れたピラミッドが点在し、少し寂しい写真となっているが、歴史的には重要な遺跡であるため、ぜひ機会があれば訪れて欲しいと思う。





## 参考文献

Dows Dunham, *El-Kurru*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.1; Boston, Harvard University Press 1950).

Dows Dunham, *Royal Tombs at Meroë and Barkal*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.4; Boston, Museum of Fine Arts, 1957).

Dows Dunham, *The West and South Cemeteries at Meroë*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.5; Boston, Museum of Fine Arts, 1963).

David N. Edwards, *The Nubian Past: An Archaeology of the Sudan*, (Routledge, London and New York, 2004).

Geoff Emberling & Bruce B. Williams (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York, 2020.

Janice. W. Yellin, “Chapter 29: The Royal and Elite Cemeteries at Meroe”, in Emberling & Williams (eds.), 2020, 563-588.

Marjorie M. Fisher (ed.), *Ancient Nubia: African Kingdom of the Nile*, The American University Press, Cairo, 2012.

---

<sup>1</sup> ピイ(Piye)とも言う。このクシュ王は(エジプト王と同じように)自らの名前をエジプトのヒエログリフで記し、カルトゥーシュ(王名柁)で囲んでいる。

<sup>2</sup> 西墓地は南墓地より数世代(*several generations*)早く利用が始まり(紀元前9世紀初頭以降)、メロエ期の終わり(紀元後4世紀中頃)まで継続して墓の造営が行われたと考えられている(Yellin 2020, p.570.)。

<sup>3</sup> 登録番号はW 1~W 870まで使われているが、W 38~W 100, W 160, W 161の番号は使用されなかったようである。しかし、1つの番号に枝番を複数つけて使用している場合もある。

<sup>4</sup> 本来であれば「第25王朝の時期の墓」と言いたいところであるが、発掘報告書では第25王朝の時期と特定できる墓は82基しかない。しかし、第25王朝の時期から200年、300年という年代幅を持つ墓は221基もあり、ナパタ期の墓の7割近くがこのような年代設定となっている。

<sup>5</sup> 発掘報告書では墓の年代幅が広く設定されているため、時期ごとの墓の数の変化についても、おおよその傾向を出すことしかできない状況である。

<sup>6</sup> Yellin 2020, p.573. 家族や臣下など重要な人物と関りのある人々の墓が衛星墓として築かれた場合も多くあると思われる。